



10通りの「ハイ」

園長 山中 文

ことばを聞く時、私たちは、その文字のみ理解するのではなく、声色からその感情や意図を一緒に読み取ります。子どもたちも、同じように他者のことばを読み取っているのでしょうか。

吉永早苗氏は、「ハイ」ということばを子どもたちがどのように読み取るか、という実験を行っています¹。

その実験では、次の10種類の「ハイ」の音声を用意されていました。(1) 明るい返事の「ハイ」、(2) 聞き返す感じの「ハイ↑」、(3) 「わかった、わかった」という感じの「はあい*」、(4) どうでもいい感じの「はい」、(5) 注意を喚起させる「ハ～イ」、(6) 「いやいやながら」な感じの「はーい」、(7) 話題の転換として「*ハイ」、(8) 命令、急がせる感じの「ハイ*」、(9) 緊張した感じの「ハイ」、(10) 「やれやれどうしたの？」という感じの「はあい↑」(*は咽頭閉鎖音、↑は上昇調、↓は下降調、～は明るい長音、ーは暗い長音、カタカナは歯切れのよい音調を表す)

これらの「ハイ」を、文脈から切り離して3つの幼稚園・保育園の年長クラスの子どもたちに聞かせ、どのように聞き取ったか尋ねたところ、その自由回答は、実に面白いものだったようです。

(1) では、まさに「いいお返事」「先生に呼ばれて手をあげる感じ」等の回答がありました。(2) では「耳がちゃんと聞こえなかった感じ」、「頼むよーって言われてしたくない気持ちのときの変な感じ」、「お父さんが言う」、「面倒くさい感じ」等の回答が出ています。(3) では「お母さんに言われて、いっぱいやっているのに、また一つやらなきゃいけないって感じ」という回答がありました。その子どもの経験から出たものであろうことがよくわかります。(4) は「疲れているとき」「へとへと」等、(5) は「みんなが楽しい気もちになって元気が湧いてくる」等、(6) は「眠たくても寝なくて怒られて返事をした」「面倒」等、(7) は「先生に呼ばれて、喧嘩して順番よって言われたとき」等が出ていました。(8) は「焦った感じ」「早くご飯食べなさい」等の回答に加えて、「好きな人に呼ばれてドキドキ」という回答もありました。(9) で出た「部屋で検診しているときのハイ」という回答は、検診の時の緊張度が目に浮かぶようです。(10) は、「まだあるの?」「なあにー?って感じ」等の回答でした。

子どもたちは、実に豊かに、「ハイ」に込められた感情や意図を自分の経験にもとづいて読み取っていると思いませんか。中には、(8)の「ハイ*」に対して「好きな人に呼ばれてドキドキ」という回答があるなど、発言する人の感情や意図以上に読み取っていることもあります。吉永がいうように、私たちは意識して声の持つ機能を使いわけているように思いますが、もしかすると、無意識の感情や意図を伝えてしまうこともあるのです。子どもたちがこのような読み取りを学習して、そこから自ら発する言葉の表現の種類を増やしていくと思うと、私たち大人はもう一度、何をどのような声色や表情で伝えているのか、自分の発言を振り返ってみることが必要かもしれません。

12月は、お祝いのことばや挨拶など、多くのことばを交わす時期です。喜びを感じることばを贈りあえるといいですね。

1 この実験とその結果については、吉永の文献から引用しています。詳細は、以下をご覧ください。

無藤隆監修、吉永早苗著『子どもの音感受の世界 こころの耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究』萌文書林、2016

